# アイヌロ承文芸テキスト集 15 白沢ナベロ述 ウエペケレ 悪おじと少年

採録・訳・註 中川裕

キーワード:アイヌ語、口承文芸、散文説話

このテキストは、千歳市蘭越出身の白沢ナベ氏(1905-93: 戸籍上は 1906-)の語りによる uepeker「散文説話」で、1987年 10月 3日に白沢氏の自宅において録音したものである。整理 番号は N8710302UP。

#### あらすじ

私(少年)は母とふたりで暮らしていた。母はいつも泣きながら薪取りや食事の支度をしていたが、私にはなぜ母が泣いているのかわからなかった。そのうちに母は私に遊びの小弓、遊びの小矢を作ってくれ、「それで柱を射て遊んでいるんだよ」と言って、犬やネズミの出入り口をふさぎ、戸口や窓をしっかり縛って、私が外に出て行かないようにして、薪取りに出かけるようになった。

ある日のこと、外から下駄をはいて急ぎ足でやってくる音が聞こえ、戸がばっと開いたので、 見ると年配の男の人だった。男の人は私を見ると、「こんなに大きくなったのだから、沖漁に連れ て行ってやろう」と言った。それを聞くと母はばっと飛び起きて、「まだこんなに小さいものを、 沖漁に連れて行くなんて、私はそんなこと考えたこともないぞ」と言って怒った。すると男の人 は、「明日になったら連れに来るからな」と言いおいて行ってしまった。

次の日まだ夜も明けきらないうちに男の人はやってきて、「さあ、沖漁に連れて行ってやろう」という。母が「こんな小さな子供を、どこに連れて行こうと言うんだ」と言って激しく怒ると、男は私の指先をつかんで、海岸への道を引きずって行った。すると、海岸の草原に舟が引き上げてあり、その中に私を乗せると、男はクマさながらの力を出して、その舟を海に押し出した。母がそれを追いかけてきて、ふなべりをつかむと、男は母の手を竿や櫂で殴りつけた。母はのどもとが水に浸かるほどまで追いかけてきたが、男は母の言葉も聞き入れず、舟を漕ぎ続けた。

まだ夜が明けていないので、どっちの方角に向かっているのかわからなかったが、そのうちに

夜が明けてくると、私の故郷は遠くにかすみ、よその山がだんだん大きくなってきた。すると、 男はその山も通り越して沖の方に舟を向け、さらに沖へと漕いでいった。また別の山が見えてき て、近づくと切り立った崖が海からそそり立っていた。そこにほんのひとりかふたり座れる程度 の砂浜があり、男はそこに舟を上げると、「明日になったら、漁に行って、魚をたくさん捕って帰 るからな」といって、静かに座った。

そのうちに私がちょっと居眠りをすると、舟を漕ぐ音がする。はっと目を覚ますと、男はすで に舟を沖に向かって漕ぎ出していた。

「おじさん、僕を忘れているよ。おじさん、僕を忘れているよ」と叫んだが、男は「お前にいいことをしてやろうとして、連れてきたとでも思っているのか」と言って、そのまま舟を漕いで行ってしまった。私は泣いて泣いて泣きわめいて、そのうちに眠ってしまった。

すると、夢の中で私の枕元にいかにもカムイらしい姿の人が座って、こう言った。

「泣くのではない。なんとかして私がお前を母親のもとに帰してやるからな。ここは険しい崖が 6重に重なったところで、普通の人には登れないが、私の力でお前は一足でここを登れるだろう。 そのうちに歩きやすいところに出るので、母のところに帰れ。おまえの母親は食事もせずに泣き 続けて、もう骨と皮ばかりになっているが、死なせるのではないぞ。おまえの父も同じようにこ こに連れて来られて死んだ。それで、お前の母親は泣きながらお前を育てていたのだ。そのこと も忘れるな」

そのような夢を見た。夜が明けて、私はカムイの言うとおりひと走りでその急な崖を上り、普通の人でも歩けるようなところに出たので、山の裏側を通って、何か月もかかって我が家にたどり着いた。我が家は手入れもされずに、近くから伸びたつる、遠くから伸びたつるが巻きついていた。炉の煙がうっすらと立ち上っていたので、入ってみると、母は夜具をかぶって寝ていたが、あまりやせ細っていたので、ただ夜具だけが敷いてあるようだった。

私は「生きて帰ってきましたよ」と言って母をゆり起こしたが、母は、「夜も昼も悪い神が来て うるさいことよ。また私をわずらわせに来たな」と言って、夜具の下でいやいやをするばかりだ った。

「帰ってきましたよ。生きて帰ってきたんですよ」といってさらにゆすると、母は袖口から私を のぞき見て、がばっと起き上がると私に抱きついた。まさかそれほどの力が残っているようには 見えなかったが、とび起きて私に抱きついてわんわん泣いた。

「あの後、あの悪党が戻ってきて、『沖で大きな魚を突いたのだが、息子の体に綱を巻きつけてい おいたのに、小さかったので海に引き込まれてしまった』と嘘をついた。それから毎日やってき ては、私に妾になれという。腹を立てて叩いたり引っ掻いたりすると、頭にきたと言って、家に ある杯や鉢や行器などの宝物をみんな持って行って、我が家を空にしてしまったけれど、私の寝 床の下に刀一振り、槍一振りだけが残っていた。お前がカムイの御加護で生きて帰ってきたとい うことは、これで仕返しをしろということだ」

そう母は言って、刀と槍を出してくれた。私は海を回って何年もかかって歩いて帰ってきたが、 その間カムイの加護によって、何も食べなくてもお腹もすかずにに歩いてこられた。母が料理を 作ってくれたので、何年ぶりかに鍋に入ったものを食べることができて、おおいに満足した。少 し休んだが、「私を殺そうとしたものを、いつまでも生かしておくものか」と思ったので、がばっ と立ち上がり、刀を下げ、槍を杖代わりについて、おじの家に向かった。

戸をばっと開けて、中に入ると、おじは上座を向いてもみあげを掻いており、おばは下座を向いて糸撚りをしていた。私が入ってくるのを見たおばは、「ひええ!」と言って、下座に這いずって行った。その声を聞いて振り返ったおじも私を見ると「ひええ!」と言って上座に這いずって行った。そのおじの首筋に槍を突き刺して動けないようにしておいて、刀で首を切り落とした。次におばのほうへ行って、同じように首を切り落とした。

それから母親を呼んできて、その家にあるもののうち、どれが我が家から盗まれたものか尋ねた。母は「これも、これも、これも私の家にあったものだ」というので、それを全部外に運び出すと、おじはたいそう物持ちのように見えたが、我が家のものを運び出すとたいしたことのないものだけが残った。そこで家に火をつけて全部燃やしてしまった。

その後私は母の面倒を見て、クマやシカをたくさん捕り、良い魚を捕ってきて世話をするうちに、母も昔の姿を取り戻した。そのうちに、どこからか美しい女性がやってきて、我が家に泊まるようになったが、たいそうな働き者であったので、妻に迎えた。妻は畑仕事を一生懸命やったので、倉を二つも三つも建てるほどだった。私も立派なクマや立派な魚を獲ってきて、保存食料を作るのに家の中では間に合わず、表に干し竿を立ててぶらさげ、そこから油が滴り落ちた。

そのうち妻はお腹が大きくなり、立派な男の子を産んだ。女の子も生まれてかわいがって暮ら しているうちに、母は何の病気かわからないが、早くに亡くなってしまった。私は子供にも恵ま れ、妻と幸福に暮らした。

## 解説

この物語は千歳における伝承だが、この類話と思われる話を、私は 1983 年 7 月 28 日に、沙流郡平取町の木村きみ氏から聞いている (K8307283UP)。それについては、「石狩の少年と悪おじ」というタイトルで、日本民話の会編『世界昔ばなし(下) アジア・アフリカ・アメリカ』(講談

社文庫、1991) に全訳を載せ (57-83 頁)、また中川裕『語り合うことばの力』(岩波書店、2010) にもあらすじを掲載している (142-153 頁)。

この「石狩の少年と悪おじ」は数ある散文説話の中でも、特に波乱万丈な多層的な構造の話であり、それに比べると本編は非常に簡単な構造をしていて、いわばその原型のような内容になっている。「石狩の少年と悪おじ」の構成をおおまかに述べると次のようになる。

- ①母親と暮らす兄弟がおじに無理やり沖漁に連れ出され、置き去りにされる。
- ②兄弟はおじによって tuyma repunkur「遠くの沖の人」に売られたのであり、兄は釣りのえさにされて殺される。
- ③弟(主人公の少年)は tuyma repunkur の姉によって逃がされる。
- ④少年は hanke repunkur「近くの沖の人」の村にたどり着き、そこで大事に育てられ、「下の姉」と結婚する。
- ⑤主人公があまりに優秀なので、hanke repunkur の父親が嫉妬し、彼を殺そうとする。彼は妻から kane mour「金属の下着」を譲り受け、上の兄を殺し、傷だらけになりながら村を脱出する。
- ⑥主人公はさ迷い歩いて兄妹に助けられ、そこで傷をいやす。
- ⑦主人公はその兄と狩りに行き、大きなクマをしとめるが、そこに kimun aynu「山男」という 化け物と遭遇する。
- ⑧その kimun aynu が下流の村の村長になりすまし、クマの霊送りのたびに人間の若者を一緒に殺して送るので、村がそのために滅びかけていることを夢の中でクマ神に告げられ、その村に向かう。
- ⑨一緒に送られることになっていた娘とその兄の家に泊まる。
- ⑩送られる予定の子グマを殺すふりをして、kimun aynu を棍棒で叩き、首を切り落として殺す。 それで一緒に送られることになっていた娘を救う。
- ①hanke repunkur の村に残してきた妻が主人公を探し当て、生まれた息子ともども再会する。
- ②妻と息子、自分を助けた兄妹とともに、故郷の家に戻る。
- ⑬生きていた母と再会する。母から悪おじに家財道具を奪われたが、刀と槍が寝床の下に残って いたことを知らされる。
- ⑭おじの家に乗り込み、おじ夫婦と子供たちを皆殺しにする。
- ⑮自分を助けてくれた兄妹を、子グマとともに送られるところを救った兄妹と結婚させ、村を再 興する。
- ⑩母は早くに亡くなるが、自分は子供も大勢生まれ、幸せな生涯を送って人生をまっとうする。

ということで、本編はこの中の①③④⑥に当たる部分が語られているということになる。「石狩の少年と悪おじ」は、いくつものばらばらなエピソードをただつなぎあわせたというものではなく、それぞれのエピソードが有機的に絡んで、家族を失ってはとりもどしながら成長していく少年の生涯を描くみごとな構成になっているが、やはり最初からそのような形で出来上がったものではなく、本編のような話を核にして、さまざまな別のエピソードを取り込みながら練り上げられていったものだろうと思われる。その点で本編は、口承文芸の形成過程という問題を考える上で、貴重な資料となっている。

1987年10月というのは著者が白沢氏に2度目にお会いした時であり、本編は白沢氏から聞いた初めての uepeker「散文説話」である。白沢氏はその少し前から、千歳の中本ムツ子氏や林元一氏などの誘いで、人の集まる場所でアイヌ語の物語を語るようになっていたということだが、そういう場ではおもに kamuyyukar「神謡」を語っていたようであり、uepeker はまだ語り慣れていない感じであった。それが話の展開にも若干影響していると思われるところがある。そのひとつは、主人公の少年の夢の中に現れ、彼が母のもとに帰るのを手助けしてくれる kamuy が、何の kamuy であって、どういうわけで少年を手助けしたのかが、描かれていないところである。そのことについて本人に尋ねればよかったのだが、当時そこまで理解が届かず、聞かずじまいになってしまった。

普通に考えれば、父親が祈っていた kamuy というのがまず挙げられるだろう。しかし、父親もおじの手で同じように殺されてしまっているので、なぜその時には助けなかったのかという疑問が生じる。topattumi「夜襲」や、流行病などで村が全滅する時、赤ん坊を助けてくれるよう神々に祈って、親たちは殺されてしまうというのが常であるが、その時に赤ん坊を助けてくれるのは、日常父親が祈っていた kamuy ではなく、それらが「誰が人間の赤ん坊を育てて、おしっこやうんちをひっかけられたいものか」といって窓を閉ざしてしまうので、たまたまそれを見かけた、いままでその家と関係していなかった kamuy がいたしかたなく人間の姿になって育てるというような話がよくある。

「石狩の少年と悪おじ」の場合は、主人公を助けてくれるのは、tuyma repunkur の姉であり、hanke repunkur の下の姉(妻)であり、また人間の兄妹であって、kamuy ではない。途中で夢の中に出てくるクマの kamuy は、kimun aynu を倒せる人物として主人公に目をつけたのであって、主人公を生き延びさせる助けをしてくれたわけではない。ただし、主人公が妻たちと一緒に母の家に戻るときに、まるで誰かが操っているかのように、舟がまっすぐ故郷の村をめざして水の上を進んでいくという描写があり、それを行っている kamuy が誰かと言えば、そのクマ以外に

は該当するものがないので、それが故郷に帰還する助けをしてくれたと考えることはできる。

ということで、本編で主人公を助けた kamuy が何かということについては実はてがかりがなく、その意味でいけば、本編にはさらに何かエピソードがあって、その部分が欠如しているために、この kamuy が何者であるのかわからないということになっているのかもしれないと考えられる。その疑問を解明するためには、さらに類話や、本編の別テイクを探していく必要があるだろう。

テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、= (イコール)は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。 $_-$  (アンダーバー)を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、 $an\ w_a \to an\ ma$ 。 $h_i$  や $y_ak$  のような例では、h やy が脱落することを示す。… とあるのは、単なるポーズ、言いよどみを表すのではなく、その後で明らかに別の語句に言い直したと思われる場合に付す。その際、\*re … などのように\*eを添えたものは、単語が言いさしになって、不完全な形で終わっていることを示す。なお、こうした言いさし・言いよどみは、それを示しておかないと、どこまでを言い直しているのか判断がつかなくなるような場合にのみ示してある。\*eのように\*e>のように\*e0、で示したのは、佐藤知己氏が「有音休止」と呼んでいるものであり、おもに発話の最後の音節を繰り返す形で、次の発話までの間をとる語用上の形式である。

註は各ページごとに脚註の形で示した。脚註等における N9309281FN のような記号は、私の採録した資料の整理番号である。N(白沢ナベ) 93 (1993 年) 09 (9 月) 28 (28 日に録音した) 1 (1本目のテープに収録されている) ことを示す。FN はフィールドノートの意味で、録音全体を聞き起したものを指す。また UP は散文説話(uepeker)のテキストであることを指す。

#### 文献略号

沙流方言辞典:田村すず子(1996)『アイヌ語沙流方言辞典』草風館

集大成: 萱野茂 (1977) 『ウエペケレ集大成』 アルドオ

民具: 萱野茂(1978)『アイヌの民具』『アイヌの民具』刊行委員会

萱野辞書:萱野茂(1996)『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂

神謡聖伝: 久保寺逸彦 (1977) 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』 岩波書店

吉田集成:吉田巌(1989)『北海道あいぬ方言語彙集成』小学館

### 本文

a=unuhu an ... 母がいて… a=unuhu an w a oka=an pe ne hike 母がいて私たちは暮らしていたが ona ka sak no a=unuhu ばかり a=unuhu ばかり 父はおらず母だけ 母とだけ一緒に暮らしていたところ a=unuhu patek turano an=an pe ne akusu <su> a=unuhu ene iki hi 母はこんなふうにしていた。 cis kor nina cis kor wakkata 泣きながら薪をとり、泣きながら水を汲み cis kor suke しると 泣きながら料理をすると "makanak iki wa ene cis kor suke 「どうしてあのように泣きながら料理し 泣きながら薪をとっているのだろう? | cis kor nina hi an?" と思いながらいると…いたが、 sekor vaynu=an kor an=an したけ an=an awa ponno poro=an akusu orowano <no> 私が少し大きくなると 遊びの小弓、遊びの小矢を作って sinot pon ku kar sinot pon av kar LT 私にくれてこう言った。 i=kore hawe ene an h i. これで柱を撃って e=sinot kor e=an kusune na. 遊んでいるのだよ。 nina=an w a ek=an kusune na." 薪をとってくるからね」 sekor hawean kor i=hoppa. と言いながら私をおいて行った。 犬の穴をふさぎ、ネズミの穴をふさぎ seta suv seske ermu suv seske<sup>2</sup>. apa ka sina puyar ka sinasina wa 戸をしばり、窓もしばって i=hoppa ranke wa oka=an pe ne a p 私をおいて出かけたものだったが sineanpeta <ta> tane ponno poro=an ある時、私ももはや少し大きくなった。 ponno poro=an kor 私が少し大きくなった頃、 oro ta pirakka us pe<sup>3</sup> ek hum konna そこに下駄をはいた者がやってくる音が tunastunas<sup>4</sup> h ine <ne> カラコロと鳴って

<sup>&</sup>lt;sup>1</sup> toppispare:『神謡聖伝』神謡 18 註 2 「a-top-pishpare a (我) top (<竹、矢竹:ネマガリダケ opne-top を用いる) pishpare (ぶっつける、当てさせる);射て矢を当たらせる。」

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> seta suy seske ermu suy seske:家の中から外へ出られないようにすることを言う常套句。

<sup>&</sup>lt;sup>3</sup> pirakka us pe:「下駄をはいた者」。通常和人を指す表現だが、そうでない場合もたいがいよからぬ者であることが多い。

<sup>4</sup> tunastunas: tunas「早い、早く」という動詞の重複形だが、この場合は擬音語・擬態語のように使われている。急ぎ足で歩いてくる様子を表していると思われる。

apacaka wa inkar=an akusu poro sukup kur apacaka hine ene hawean h i ene an h i<sup>5</sup>. "tane e=kor hekaci <ci> pakno an yakun ... pakno an kusu repa or un a=tura vakka pirka ruwe ne." sekor hawean kor ... hawean akusu a=unuhu ca hepitani hepita ekannayukar.<sup>6</sup> <ar> "ene pak an pe<sup>7</sup> hunak un a=tura wa hemanta a=kire kuni a=ramu ka somo ki no an=an ruwe ne awa, ene hawas h i ne ya?" sekor hawean kor iruska hine konto <to> hosipi wa arpa. "nisatta an w a ne yakne repa or un a=tura kusune na." sekor hawean kor hosipi wa arpa wa oar isam. okake ta cis kor iruska ... cis kor iruska korka ene iruska p ka a=erampewtek wa an=an akusu <su> nisatta sekor hawas wa sirpeker wa

a=i=tak kuni p ne hawe ne kunak a=ramu a p

年配の男性が戸を開けて
このように言った。
「もうお前の息子もこれくらいになれば
これくらいになったのだから、沖漁に
連れて行ってやってもいいぞ」
と言いながら…言うと、
母は罠のばね木のようにはね起きて
「こんな幼い者をどこかへ連れて行って
何かさせようなどと思わずに
私はいたのに、そんなことを言うのか?」
と言って怒って

すると(男は)帰って行った。

「明日になったら

戸を開けたので、見ると

沖漁に連れて行ってやるからな」 と言いながら帰って行ってしまった。 その後、(母は) 泣きながら怒って

泣きながら怒っていたが、

何を怒っているのか

私にはわからないでいるうち、

明日ということだから明るくなってから

連れに来るという話だと思っていたのに

<sup>5</sup> ene hawean h\_i ene an h\_i : ene hawean hi は「このように言った」、 ene an hi は「このようである」ということで、前者だけで十分なのだが、白沢さんの言い癖としてこのようにふたつ重ねることが多い。

<sup>6</sup> ca hepitani hepita ekannayukar: ca 「小枝」hepitani「ばね木」 hepita「はじける」 ekannayukar「~かのように」。うさぎなどをとるために、細い木を曲げて、その先を地面に打ち込んだ枝にひっかけ、そこに糸で作った輪をとりつけて罠にする。うさぎがその輪に首を突っ込むと、木が枝からはずれてぴんと跳ね返り、うさぎを宙づりにする。その木を hepitani「ばね木」 < hepita「はじける」ni「木」と呼ぶが、その hepitani がはじけるように、がばっと起き上がったという描写。罠の作り方については、『民具』p.162に、図が示されている。

<sup>7</sup> ene pak an pe: ene 「このくらい」 pak 「まで」 an 「ある」 pe 「もの」。男の方は pakno an 「これほど・ある」と言う表現で、「こんなに大きくなった」ということを表しているが、母親のほうは同じような表現で、「まだこれほどしか大きくなっていない」ということを言っている。

nisat or peker kane siran kor suv ek humi as h ine apacaktektek hine "tane repa=an kusu repun=an etokus ruwe ne na." sekor hawean kor ... sekor hawean akusu, orowano a=unuhu "ene pak an pe a=nepkire wa a=e kuni a=ramu ka somo ki no a=resu ruwe ne na." sekor hawean kor iruska ar iruska tov iruska ki akusu a=tekpecihi<sup>8</sup> sikoetaye hine i=rueninpa<sup>9</sup> hine pis ta i=tura wa san hine, pis ta <ta> poro cip sanke masar makun masar<sup>10</sup> ... sanke masar makun masar masar uturu a=koetaye<sup>11</sup> wa an anan<sup>12</sup> pe kimunpe ot tum vavkosanke<sup>13</sup>. sinen ne ehoyupu wa atuy ka ...

夜が白み始めた頃に またやってくる音がして、 戸をぱっと開けて 「さあ、沖漁に行くので これから沖に出るからなし と言いながら… と言うと、すると母は 「こんな幼い者を働かせて食べようなんて 私は考えもせずに育ててきたのだし と言いながら腹を立て むちゃくちゃに怒りを表すと (男は) 私の手を引っ張って、 道なりに引きずっていき、 浜に連れて下りて 浜に大きな舟 浜手の草原、奥の草原 浜手の草原、奥の草原、 草原の間に引き上げてあったものを クマのような力を出して ひとりで走って海の上

8 tekpecihi: askepet は一本一本の指を指すが、tekpet は4本の指を揃えた状態を指す。つまり4本の指をまとめてつかんで引っ張ったということである。

<sup>9</sup> rueninpa:おそらく、ru「道」e「 $\sim$ <場所>を」ninpa「 $\sim$ を引きずる」。浜に向かう道を、手をつかんで引きずって行ったということだと思われる。

<sup>10</sup> sanke masar makun masar: masar は海岸の砂浜を上り切ったところから広がる草原。そこをさらにふたつに分けて、浜手のほうを sanke masar、奥のほうを makun masar と呼ぶ。

<sup>11</sup> masar uturu a=koetaye: これは常套句ではあるが、舟を砂浜ではなく、さらにその奥にまで引き上げるというのは、おそらく舟に「もやい」がついていないので、絶対に潮がこないところまで引き上げておくということであろう。

 $<sup>^{12}</sup>$  anan:後からそうであったことに気がついたことを表す助動詞。沙流方言では aan、幌別方言では awan など、方言によって形が異なる。

<sup>13</sup> kimunpe ot tum yaykosanke: これも常套句。kimunpe は「クマ」で、tum は「力」だが、ot は不明。「まったく、すごく」を表す接頭辞の or-かとも思うが、kem-ot「血が出る」の ot かもしれない。どちらの解釈も文法的にはあまりうまくいかない。

atuv ka ta sanke hine oro i=ekatta hine ki akusu, a=unuhu "ene pak an pe hunak un a=tura ya?" sekor itak kor i=kesanpa wa cip kisma kusu i=kesanpa. tekkokikkik<sup>14</sup>. turi ani assap ani tekkokikkik kor ...kor wa paraparak kor i=kesanpa wa <wa> rekuci pakno as<sup>15</sup> wa i=kesanpa ruwe ne korka nu ruwe ka isam no, orowano i=kesanna wa たか16 nu ruwe ka isam no cipoyuppa<sup>17</sup> wa orowano hunak un ka a=i=ekira humi ne<sup>18</sup> nankor v a a=eramuskari. orowano a=i=ekira wa paye=an ayne sirpeker wa inkar=an akusu a=kor mosir a=homare<sup>19</sup> kane ova mosir<sup>20</sup> i=erikipuni<sup>21</sup> kane

海の上に(舟を)出して そこに私を引き込むと、母は 「そんな幼い者をどこに連れて行くんだ」 と言いながら、追いかけてきて、 舟をつかまえようと追いかけてきた。 (男は母を) 手ごと叩いた。 竿で櫂で手ごと叩いて (母は) 泣きわめきながら追ってきて 喉まで水に浸かって追いかけてきたが (男は母の言葉を) 聞き入れもせず (母は) 私たちを追ってきて、ではなく (男は) 聞きもせずに、舟足を早めて それからどこへ私が連れて行かれるの だろうかもわからなかった。 それから連れて行かれるうちに 夜が明けてきて、見ると 私の故郷は遠くかすみ

よその山が上がってきて

 $^{14}$  tekkokikkik: tek 「手」ko「~ともに」kikkik「~をぽかぽか叩く」。ふなべりに掛けた手も、頭も、手当たり次第に叩いた、という感じだろう。

 $<sup>^{15}</sup>$  rekuci pakno as: 直訳すると、「喉・まで・立った」ということになるが、「喉のところに水が来るほど沖にまで」ということであろう。

<sup>16</sup> たか:アイヌ語で語っているときに、このような言い方をした場合は、言い間違いに気がついた時である。

<sup>17</sup> cipoyuppa: cipo「舟をこぐ」yuppa「~を激しくする」だと思われる。同じ語例は『集大成』 p.151 にも出てくる。白沢氏の同様の表現としては iruska yuppa p「怒るのを激しくしたもの」 = 「激しい怒り」などがある。

<sup>18</sup> humi ne: 視覚以外の感覚から推測・判断することを表す表現。この場合は、すぐ後で sirpeker wa inkar=an akusu と言っているのでもわかるように、まだあたりはまっくらで、どこに向かっているのか視覚的にはわからないので、siri ne ではなく humi ne を使っているのだと思われる。

<sup>19</sup> a=kor mosir a=homare: homar は「かすんでみえる」で homare はその使役形。a=は不定人称で、直訳すれば「私の国を人がかすませた」ということになる。遠く離れて行ってだんだんぼんやりしてくることを表す常套句である。

<sup>20</sup> mosir: mosir という言葉は「土地、国、山、島」などと色々に訳すことができるが、最終的に着いた mosir は後でわかるように「島」ではない。また、白沢自身が次の註で見るように「山」

paye=an ruwe ene an h i ne wa, paye=an ayne

a=kor mosir a=osirmukere.

ova mosir a=kovavrikipunpa<sup>22</sup> kane

paye=an ayne

naa ova mosir a=nukar kor

cip erepnaatte kane vavoassakote<sup>23</sup> wa

paye=an ayne <ne> oya ne ...

a=nukar mosir a=osirmukere

oya mosir ta suy paye=an akusu <su>

ova mosir ta cip yanke<sup>24</sup> wa inkar=an kusu

nupuri ... kamuv nupuri cekankotorsuve<sup>25</sup> kane

poro nupuri ... poro nupuri

nupuri oworkoas oatuykoas<sup>26</sup> usi ta

進んで、進んでいくうちに

私の故郷が見えなくなった。

よその山影が持ち上がってきつつ

進んで行くうちに

さらによその山を見ながら

舟を沖に向けて舟を漕ぎ

進んで行くうちに

私が見た山は見えなくなり

別の山に向かって行くと

別の山に舟を近づけて、見ると

神の山がそびえたって

大きな山…大きな山

山が水際から、海からそそり立っている所に

と説明しているので、以下では基本的に「山」と訳しておく。

 $<sup>^{21}</sup>$  oya mosir i=erikipuni: 白沢氏自身は「別な山が見上げてきたって。だんだん大きくなって見えてきたって。近くなるほど山が大きく見えてくるこというらしいの」 (N9309281FN) と説明している。erikipuni は e-「~の頭」riki「高所に」puni「~を持ち上げる」と分解できるが、「山がその頭を持ちあげる」という意味だと解釈すると、i=をどう意味づけるのかが不明になる。すぐ後に出てくる a=koyayrikipunpa を同じような意味のものとして考えると、「山が私の頭を持ちあげる」という解釈の方が、合っているのかもしれない。

<sup>22</sup> oya mosir a=koyayrikipunpa: ko-「~に向かって」yay「自分」riki「高所に」punpa「~を持ち上げる」ということで、「山が私に向かって持ち上がってくる」という表現だと考えたいところだが、それなら i=koyayrikipunpa となるはずであり、「私が自分をよその山に向けて持ち上げる」という表現なのだと思われる。つまり自分の位置が高くなることによって、水平線の向こうにあったものが見えてくるようになるという感覚の表現か?

<sup>&</sup>lt;sup>23</sup> yayoassakote: yay-「自分」o-「~に向かって」assa「櫂」kote「~を~に結びつける」ということで、車櫂を漕いで自分のほうにぐっと引き寄せる動作を言っているのではないかと思う。 assa は本来「櫂を漕ぐ」という1項動詞だが、この場合は名詞と解釈せざるをえないので、assap「櫂」と同じことを表していると見なした。

 $<sup>^{24}</sup>$  yanke: 「 $\sim$ を岸に上げる」と訳すことが多いが、そればかりでなく、どの位置においてであっても沖の方から陸の方向に向かわせることすべてを指すので、ここでは「(陸に) 近づける」と訳した。

 $<sup>^{25}</sup>$  cekankotorsuye: c-「自ら」e-「~の頭」kan-「上の」kotor「面」suye「~を揺らす」ということになろうが、今一つ語構成がわからない。同様の表現で沙流方言に cekantoorsoye < c-「自ら」e-「~の頭」kanto「天」or「~のところ」soye「~をえぐる」という語があるので、あるいはそのような表現から音変化したものかもしれない。

 $<sup>^{26}</sup>$  oworkoas oatuykoas: o-「~の尻が」wor「水中」ko-「~に対して」as「立つ」、o-「~の尻が」atuy「海」ko-「~に対して」as「立つ」ということで、山が水際からまっすぐにそそり立っ

ponno sinen ka tun a pakno sara uske an pe ne kusu oro ta cip vanke hine "tane te ta rewsi=an yakun ... rewsi=an yakun nisatta ne anakne repa=an w a poronno repa cikovkip a=cipekusa wa vap=an etokus ruwe ne." sekor hawean kor oro ta acapo oro ta cip yanke hine <ne> mono an. ratci an ki wa an hi ta ponno ... sirkunne wakusu ponno mokor=an tek akusu cip sanke humi as wakusu, inkar=an akusu もは rep ta cip repun w a arpa kor an. "acapo i=ovra na. acapo i=oyra na." sekor itak=an kor rayhotuypa=an. rayparaparak=an h ikeka "a=e=pirkaramu kusu tasi a=e=tura wa e=ek h i an nek<sup>27</sup>" sekor hawean kor arpa wa oar isam. okake ta cis=an a cis=an a cis=an a kor kunne hene tokap hene an=an avne <ne> oro ta mokor=an anan28 hine

ちょっとひとりかふたり座れるぐらいの 開けた場所があったので、 そこに舟を上げて 「さあここで夜を明かしたら 明日になったら沖漁に行って たくさん海の獲物を舟で運んで 陸に戻るからな」 といいながら、そこに おじはそこに舟を上げて、 静かに、じっとしていて、少し 暗くなってきたので、少し眠りかけると 舟を出す音がするので、見ると すでに舟は沖に出ていくところだった。 「おじさん僕を忘れているよ おじさん僕を忘れているよ」 と言いながら大声て叫んだ。 大声で泣きわめいたけれど、 「お前のことをよく思えばこそ 連れてきてやったんだぞし と言いながら行ってしまった。 その後、私は泣いて泣きながら 夜も昼も過ごしていたが、そのうち

そこでいつのまにか眠ってしまって

ていることを表す。

 $<sup>^{27}</sup>$  a=e=pirkaramu kusu tasi a=e=tura wa e=ek h\_i an nek: 直訳すれば、本文のような訳になるのだが、白沢なべさんはこの表現について、「お前らみたいなもの、いいと思って連れてきたんでない。仕事教えるに連れてきたんでない。殺しに来たっていうような言葉」(N9309281FN)と説明している。つまり反意的な表現である。解説で述べたように、沙流郡平取町の木村きみさんもこの話の類話を語っているが、そこでも同様の場面で"a=eci=pirkaramu wa a=eci=kuspa hi ne."「お前たちのことをよく思って、お前たちを舟でつれてきたのだ」(K8307283UP)と、主人公兄弟にほとんど同じせりふを言っている。

<sup>&</sup>lt;sup>28</sup> anan:註 12 と同じ助動詞。ここでは、「思い返せば眠ってしまっていたのだった」ということを「いつのまにか」という表現で訳している。

mokor=an anan akusu i=erupsike ta kamuv ne kusu kamuy ipor annoyekar pirka nispa i=erupsike horari wa an a ne h ine <ne> i=kohetari hine itak hawe ene an h i <ni>. "tan hekaci iteki cis. nen poka a=e=kar yakne e=kor totto oro ta a=e=rura kusune na. iteki cis no <no> nen oro ta apkas ka eaykap oworkoas nisey<sup>29</sup> ne ruwe ne kusu oworkoas nisey iwan nisey eokari nisew<sup>30</sup> kor nupuri ne ruwe ne kusu yayan kur anakne oro ta apkas ka eaykap. hemesu ka eaykap ruwe ne korka <ka> tan nupuri atcas ne e=kohemesu wa <wa> e=hemesu ayne <ne> a=oapkas usi pirka usi e=oterke easkay ruwe ne kusu <su> e=kor totto cis avne もは、骨と皮になって、ものも食わないで an ruwe ne na. nen poka iki wa siknure." sekor kane kamuy ne kusu koraci an kur hawean vak a=takar. "e=onaha ka tan te ta tura wa ek wa ray ... e=onaha ka ray ruwe ne. orowano e=unuhu cis kor e=resu katu ne ruwe ne na. ka e=eramuan kusune na."

sekor kamuy itak a=takar wa

眠ってしまったところ 私の上手にカムイならではの カムイの風貌を持つ立派な長者が 私の上手に座っていて 私のほうに顔を上げてこう言った。 「少年よ、泣くのではない。何とかして 私が母親の所に連れて行ってやるからな。 泣かないで、誰も歩くことのできない 切り立った崖であるので 切り立った崖、6つの崖が 重なっている崖を持つ山なので 普通の者はそこを歩くこともできない。 上ることもできないのだが この山をひと足でお前は登って 登っていくうちに、歩くのに よいところをお前は踏んでいけるので お前の母親は泣き続けて もう食事もせずに骨と皮ばかりになって いるのだ。何とかして死なせるなし と、カムイの姿をした人が 話す夢を見た。

「お前の父もここに連れて来られて死んだ。 お前の父も死んだのだ。そして 母親は泣きながらお前を育てていたのだ そのことも覚えておけよ」 というカムイの夢を見た。

29 nen oro ta apkas ka eaykap oworkoas nisey: ここで、nen apkas ka eaykap 「誰も歩くことができない」となっていないことに注意。nen oworkoas nisey oro ta apkas ka eaykap 「誰も屹立した崖を歩くことはできない」という文から、oworkoas nisey を主部に移動させた関係文だが、そのような構文の場合、日本語と違って oro ta 「そのところを」を省くことはできない。

 $<sup>^{30}</sup>$  nisew: 崖を nisey と言ったり nisew と言ったりしている。 nisey の言い誤りの可能性もあるが、『吉田集成』 p.38 に「にせう niseu (幌)崖, 断崖」とあるので、両方の言い方があるのかもしれない。

そして夜が明けたので orowa sirpeker wakusu ne nupuri a=kohemesu <su>. その山を登って行った as ... assey<sup>31</sup> kor nupuri ne korka ?を持つ山であるが ear cas ne hemesu=an hine ひと走りで私は登って その後ろに行ってみると、 osmakehe a=oarpa wa inkar=an akusu 普通の人でもゆっくり楽に歩け yayan kur ka ratci apkas pirka apkas easkay noyne siran usi ta sirepa=an w akusu そうな場所に着いたので orowano <no> ... そこで orowano atuy okari atuy ka a=nukar それから海の周り、海も私は見た。 山の裏側を通りながら山も…ではなくて nupuri osmak a=kus kor nupuri ka たか atuy ka a=nukar ka somo ki kane kor ek=an ayne 海も見もせずに inehempak cup<sup>32</sup> ek=an ayne 何か月も帰路をたどり続けて a=uni ta sirepa=an w a inkar=an akusu 我が家に着いて見ると a=unihi ne y akka hanke ek punkar cikonoynoye. 我が家にも近くからつるが巻きつき tuyma ek punkar cikonoynoye<sup>33</sup>. 遠くからつるが巻きついていた。 そして薄く煙が立ち上っていて orowa pan supuya anak at kor siran hine ahun=an w a inkar=an akusu 入って見ると a=unuhu <nu> heru sarampe cisirkamure<sup>34</sup> 母はやせ細って床に臥せていて pone takupi ne wa an usi ta hosipi=an. 骨ばかりになっているところに帰ってきた。 "siknu=an w a hosipi=an ruwe ne na." 「生きて帰ってきましたよ」 sekor itak=an kor と言いながら、 a=nikanika a=suyesuye<sup>35</sup> hikeka 母をゆすり起こしたが

31 assev:語義不明

"kunne hene <ne> usa wen kamuy

32 inehempak cup:「何か月も」と言っているが、後で「何年歩いたかわからない」と言っている(註 44)。

「夜も(昼も)いろんな悪い神が

<sup>33</sup> hanke ek punkar cikonoynoye tuyma ek punkar cikonoynoye: 直訳すると、近くから来たつるが自らを~に巻きつかせ、遠くから来たつるが自らを~に巻きつかせる」。長いこと手入れをされないままになっていた家屋の様子を描写する常套句。

<sup>34</sup> heru sarampe cisirkamure:直訳すると「ただ絹の着物だけが床を覆っていた」。寝具としての着物 1 枚をひっかぶって寝ているのだが、やせ細ってしまって、ただその着物だけが床に敷いてあるように見える、という意味の常套句。

<sup>&</sup>lt;sup>35</sup> a=nikanika a=suyesuye: nikanika は「~をゆすり起こす」、suyesuye は「~をゆらす」こと。

また a=i=iramsitnere have ne." sekor hawean kor simuyamuya<sup>36</sup> wakusu a=suvesuve a=nikanika. "ek=an ruwe ne. siknu=an w a ek=an ruwe ne na. <na>" sekor itak=an kor a=nikanika ayne siknuvanuva kor tusa puv kari i=nukar<sup>37</sup> anan hine <ne> cis kor i=komatke. ene katuhu an pe<sup>38</sup> somo i=komatke kunak a=ramu a p i=komatke hine i=esikari wa orowano i=ka ta cis. i=ka ta cis a i=ka ta cis a. "その wen kamuy<sup>39</sup> hosipi wa ek orowa 'repa kusu repun=an w a <ma> poro cep a=otke ruwe ne a korka a=tusanire ruwe ne a korka pon pe ne kusu a=kosneninpa wa atuy or a=ekatta wa isam ruwe ene an h i ne' sekor hawean kor sunke kor hosipi wa ek wa orowano kes to an kor ek wa 'pon mat ne an' sekor kane hawean kor i=koramkor<sup>40</sup> kor eunno tovkokikkik a

iramsitnere hi ne a p

うるさくしてしかたないが また私をわずらわせることよし と言いながらいやいやをするので 私は(母を)ゆすりおこした。 「帰ってきましたよ。 生きて帰ってきたんですよ」 と言いながらゆすり起こすうちに 目をこすりながら袖口から 私を見て 泣きながら私に飛びついてきた。 そんな姿の者が 飛びついてくるとは思わなかったが 飛び起きて私に抱きついて そして私の上で泣き続けた。 「あの悪魔が戻ってきて 『沖漁しに沖に出て 大きな魚を突いたのだが (少年に) 綱をつけてあったのだが 小さかったので軽く引っ張られて 海に引き込まれてしまったのだ』 と嘘をつきながら戻ってきて それから毎日やってきては、 『妾になれ』と言って 口説いてきたので、(私は)激しく叩き

<sup>36</sup> simuyamuya:身をゆすって嫌だという意志表示をすること。

<sup>37</sup> tusa puy kari i=nukar: 悪いものは袖口からは入ってこられないという考えから、何か怪しいものを見るときには、着物を頭からかぶったまま袖口から覗くということを行う。

<sup>38</sup> ene katuhu an pe: 骨と皮ばかりになってしまって、起き上がる力もなさそうに見えた者がという意味。

<sup>&</sup>lt;sup>39</sup> wen kamuy:「悪いカムイ」。もちろん悪おじのことを言っている。kamuy という言葉を使っているが、おじはれっきとした人間であるし、敬意が込められているわけでもない。このようなkamuyの使い方もある。

<sup>&</sup>lt;sup>40</sup> i=koramkor: koramkor は「~に相談する」という意味にもなるが、『萱野辞書』には「ちょ

toykoamekompa. amucitpa<sup>41</sup> kor konto それ 'ruska ruwe ne' sekor hawean kor cise or o p tuki でも patci でも sintoko でも suwop でも rura, uni un ki wa oha ruwe ne. a=unihi oha ruwe ne korka, あの emus sinep op sinep patek kasi a=ehotke<sup>42</sup> wa neun poka e=iki wa kamuy or wa e=erampokiwen w a e=siknu wa e=hosipi wa ne yakne <ne> <ne> e=vayattasa ki kuni kusu emus sinep op sinep patek kasi a=ehotke kuskeraypo, an ruwe ne na." sekor hawean kor sanke hine orowa suke wa ipe=an h ike <ke> apkas ani atuv okari ek=an<sup>43</sup> pe ne kusu <su> hempak pa <sup>44</sup>ka apkas=an humi ne va ka a=eramuskari. ipe ka somo ki no apkas=an korka, kamuy "e=ipe rusuy ka somo ki no e=uni ta e=sirepa pakno <no> kamuy oro ... or oipe e=ki kusune na ... kusu おもいきり掴みあげ、引っ掻くと 『腹が立った』と言って 家にあるものを 杯でも鉢でも行器でも 箱でも自分の家に運んで空にして 我が家を空にしたけれど 刀一振り、槍一振りだけ上に私が寝ていて なんとかして お前がカムイに憐れんでもらって 生きて帰ってきたのなら 仕返しをすべきなので、 刀一振、槍一振りだけ 私がその上に寝ていたおかげで、あるのだよ」 と(母は)言いながら出してきて、 それから料理を作ってくれ、食事をしたが 歩いて海をぐるっと回って帰ってきたので 何年歩いた のかわからない。 食事もしないで歩いていたのだが、カムイが 「お前はお腹もすかせずに 家に着くまで

カムイから食事を与えられるから

っかいをかける,女を口説く,女を誘ってみる」という訳が載っており、ここではまさにその用例であろうと思われる。

<sup>41</sup> toykokikkik a toykoamekompa amucitpa: 3人称なのでおじの動作かもしれないが、母の動作として考えたほうが辻褄が合う。

 $<sup>^{42}</sup>$  emus sinep op sinep patek kasi a=ehotke: 自分が寝ている下にそれらがあったので、持って行かれずに済んだということ。刀や槍は刀身・穂先の部分だけで、柄がついているわけではない。  $^{43}$  atuy okari ek=an: この表現からすると、主人公が連れていかれたのは、故郷とは地続きのと

ころであって、島ではなかったということになる。

<sup>44</sup> hempak pa:註32 では「何か月」と言っているが、ここでは「何年」と言っている。さらわれた時にはまだ漁にも出られないはずの幼い子供だったのが、この後槍と刀を振るっておじに復讐を遂げていることからして、相当の年月が経っていることが想像される。したがって、ここのhempak pa という表現のほうが適切であろうと思われる。

e=ipe rusuy ka somo ki no e=apkas kusune na." sekor kamuy itak pe ne a kusu ne hi koraci iperusuy=an ka somo ki no ek=an a korka inehempak pa su or o aep a=e ka eramuskari. a=e akusu a=esampekese kosituriri. a=esampenake kosituriri<sup>45</sup> a=e hine irukav sini=an hine orowa "i=rayke kusu iki p ney pakno a=siknure wa an=an he ki" sekor vaynu=an kusu matkosanu=an hine <ne> emus a=sitomusi. op a=ekuwakor hine a=acaha ... acapo ne sekor a=ye p ene iki hine akihi ka rayke wa isam. その子供<sup>46</sup>も rayke wa isam kusu iki hi ne kusu その子供も殺そうとしたのだから oro ta <ta> arpa=an hine apacaktektek=an w a inkar=an akusu a=acaha eronne no an w a yayrekkisar kikikiki<sup>47</sup>. おじは上座を向いてもみあげを掻き掻き a=unarpehe eutunne no an w a otu ka sinkop rankeranke ore ka \*sin ... ka sinkop rankeranke<sup>48</sup> kor an w a ahun=an ruwe unarpe nukar akusu

お腹をすかせずに歩けるだろうよし とカムイが言ったので そのとおり、お腹もすかせずに 戻ってきたのだけれど、何年 鍋に入った料理を食べていなかったことか。 (母の料理を)食べて肝がのびのびした。 満足して食べて すこし休んで そして「私を殺そうとしたものを いつまでも生かしておくものかし と思ったので、がばっと立ち上がり 刀を下げ、槍を杖のように突いて おじだというものがあのようにして 自分の弟も殺してしまった。 そこ(おじの家)に私は行って 戸をばっと開けて、見ると おばは下座を向いて 二つの糸の輪を下ろし下ろし 三つの糸の輪を下ろし下ろし ながらいて、 おばは私が入ってくるのを見ると

"avapo ovovo<sup>49</sup>"

「ひええ!」

<sup>45</sup> a=esampekese kosituriri a=esampepake kosituriri:「~で心臓の下端が伸び、心臓の上端が伸 びる」。苦痛や空腹にさいなまれていたのが、解消された場合などに用いる常套句。koは「~に向 かって」と考えるより、虚辞とみたほうがよさそうである。

<sup>46</sup> その子供: 主人公のこと。

<sup>47</sup> yayrekkisar kikikiki: 何かまずいことが起きることの前兆を感じていることを表す常套句。

<sup>&</sup>lt;sup>48</sup> otu ka sinkop rankeranke ore ka sinkop rankeranke : sinkop は糸を撚る時に糸がねじれてでき る輪。わさ。それが糸が伸びるにしたがって自然に下に下に下がっていく様子を描写する常套句。

<sup>&</sup>lt;sup>49</sup> ayapo oyoyo: 驚いた時に上げる叫び声。

sekor hawean kor eutunne sinusinu. ioyamokte a=wenacaha i=nukar akusu "avapo ovovo" sekor hawean kor eronne sinusinu. a=emotcattuve a=sirkootke<sup>50</sup> hine penrekuci a=etursere. "nep acapo ene iki pa hi ne wa utari ronnu va?" sekor itak=an kor a=emotcattuye a=sirkootke いや, a=emotcattuye ... a=emotcatotke a=sirkotuve<sup>51</sup> penrekuci a=etursere. orowa konto eutunne sinusinu wen unarpe a=emotcattuve a=sirkootke penrekuci a=etursere. 刀で penrekuci etursere. orowa okake an wakusu a=unuhu a=hotuvekar hine <ne> a=kor iruska <ka> an ruwe ne korka <ka> a=unihi o p ka rura wa isam sekor a=unuhu itak pe ne kusu a=hotuvekar hine <ne> inan pe a=kor pe ne ya

inan pe a=acaha kor pe ne ya LT

と言いながら下座へ這いずって行った。 (それを) いぶかしんだ悪おじは私を見ると 「ひええ!」 といいながら上座に這いずって行った その首筋を私は切って、激しく突いて 首を切り落とした。 「おじはなんだってこのようなことをして 家族を殺したのだ?」 と言いながら首筋を切って激しく突いて いや、首筋を切って… 首筋を突いて、激しく切って 首を切り落とした。 そして今度は下座に這って行った悪おばの 首筋を切って激しく突いて 首を切り落とした。 刀で首を切り落とした。 それからそれが済んだので 母を呼んで 腹はおさまらなかったが 我が家にあったものも持って行ったと 母が言うので

(母を) 呼んで

どれが我が家のものか

どれがおじの持っていたものかを

<sup>50</sup> a=emotcattuye a=sirkootke: e-「~で」motcat「えらの部分」tuye「~を切る」 sirko-「激しく」otke「~を突く」。数行後に、a=emotcatotke a=sirkotuye のように、otke「~を突く」と tuye 「~を切る」を入れ替えている。註 49 参照。

 $<sup>^{51}</sup>$  a=emotcatotke a=sirkotuye: 首筋の鎖骨の間の骨のないところを、後ろの骨の下に刃が行くようにして刺すこと。 motcat は魚のえらの部分にあたり、ここを突かれると魚でも人間でも動けなくなるという。首筋を突いて動けないようにしておいてから、切り落とすわけなので、emotcattuye よりemotcatotke のほうが正しい表現だと思われるのだが、この翌年に聞いた N8804061UP(CES8 号掲載「アイヌロ承文芸テキスト集6 兄に殺されかけ、犬に救われた」でも、a=emotcattuye a=sirkootke と言っている。

a=kowepekennu したっけ
"taan pe ka taan pe ka
a=unihi o p ne ruwe ne."
sekor hawean pe ne kusu,
それ soyne a=rura hine
orowa inkar=an したっけ
semas ... semas nispa horari ruwe pakno<sup>52</sup>
horari p ne anan wa, orowa konto
a=kor pe opitta soy a=o p ne kusu <su>

orowa a=unihi o p a=rura wa a=unihi a=esikte hine orowano a=unuhu itasa<sup>53</sup> kasi a=oyki paro a=oyki.

ekimne=an kor tup sumawe a=kor\_

rep sumawe a=kor.

kamuy ne yakka yuk ne yakka

poronno a=ronnu <nu>

cepkoyki=an kusu pet or\_ ta arpa kor

pirka cep patek <tek> a=numke wa a=rura wa

a=unuhu kasi a=oyki paro a=oyki ayne

a=unuhu ka teeta nanka teeta sirka kor hine

orowa oka=an kor pirka katkemat

hunak wa ka yayomananka<sup>54</sup> hine <ne>

i=or ta rewsi ka ki

尋ねると

「これも、これも、これも

私の家にあったものだ」

と言うので、

それを外に運び出して

その後で見ると

普通の人が暮らす程度の

暮らしぶりであった。そして

我が家のものを全部外に出したので

okakehe a=nuyeotke hine a=uhuyka wa oar isam. その後火を放って、燃やしてしまった。

それから我が家のものを運んで

我が家をいっぱいにして

それからはお返しに

母を面倒みて養った。

山へ行くと2頭の獲物を獲り

3頭の獲物を獲った。

クマでもシカでも

たくさん獲った。

魚捕りに川に行くと

良い魚ばかり選んで捕ってきて

母を世話し、養ううちに

母も昔の顔、昔の姿を取り戻して

そうやって暮らしていて、美しい女性が

どこからかやってきて

我が家に泊まったり

<sup>52</sup> semas nispa horari ruwe pakno: semas は「普通の」「凡庸な」。一見宝物がたくさんある、たいそうな暮らしぶりに見えたのだが、盗んだものを外に出したら、たいしたものは残っていなかったということ。

<sup>53</sup> itasa:「交代して」。子供の時は母に世話してもらっていたのだが、今度は逆に自分が母を世話するようになったということ。

<sup>&</sup>lt;sup>54</sup> yayomananka: yay-「自分」omanan「旅をする」-ka「~させる」。omanan「歩き回る、旅をする」と同様の意味。

somo ka ki kor an ayne nepki mono sirka un ka somo ki no nepki katkemat ne kusu <su> katkemat a=kor hine <ne> uepirka=an. tovta kor tu pu epuni re pu epuni. ekimne=an kor cepkovki=an kor pirka cep patek pirka kamuy patek pirka vuk patek a=eawnarura wa <wa> cise or ta ikasma hike<sup>55</sup> soy ta kumakar=an w a 家の中で余ったものは外に竿を立てて kuma or wa a=racitkere.

osumtapes wa <wa> ... sumi cik kor okay. konto a=macihi honkor hine pirka pon hekaci yaykosanke wa orowano a=ukoomap kor oka=an. hekaci ka kor matkaci ka kor wa <wa> a=ukoomap kor oka=an ruwe ne hine <ne> a=unuhu ka tane <ne> ...

makanak ka iki hi ne ya hem tasumi hem siyeye ki hine tunasno isam ruwe ne korka a=macihi a=epirka wa <wa> a=poutari a=epirka wa oka nispa a=ne ruwe ne kusu

a=eysoytak hawe ne na.って。

泊まらなかったりするうち 働いて地面に腰を下ろさないほど

働き者の女性だったので

妻に迎えて、一緒に豊かに暮らした。 畑仕事をすると二つも三つも倉を立てた。

山へ行き、魚捕りをすると

良い魚ばかり、立派なクマばかり 立派なシカばかり獲ってきて

竿からぶら下げた。

そこから油が流れ、油が滴り落ちた。 そのうち妻はお腹が大きくなって

立派な男の子を産んで

その子を一緒にかわいがっていた。 男の子も生まれ、女の子も生まれて 一緒にかわいがって暮らして

母ももう

どうしたことであろうか 何かの病気、何かの病にかかり 早くに亡くなってしまったが 私は妻と幸福に暮らし 子供たちにも恵まれた長者で

私はあったので

その話をしたのだ、って。

(なかがわ ひろし・千葉大学文学部)

<sup>55</sup> cise or ta ikasma hike:獲った魚や肉は保存食料にするために干したり燻製にしたりするが、 家の中だけでは間に合わない分については、ということ。

# Ainu Folklore Text-15 Nabe SHIRASAWA's *uepeker*

NAKAGAWA Hiroshi

## **Summary:**

This text was told by the late Ms. Nabe Shirasawa (1905-93, born in Chitose), on August 31, 1988. It is the story of an Ainu boy who had been kidnapped by his uncle and abandoned on a tiny beach surrounded by precipitous cliffs. The author recorded a similar story told by Ms. Kimi Kimura in Piratori in 1983. The kimura's story is much more complicated and long. The author surmises that the Shirasawa's story may show one of the types of nuclear story from which Kimura's story had been developed involving other episodes.

### **Outline of text:**

I lived with only my mother, who worked weeping day and night. One day a man came in my house, saying, "Tommorrow I'll take you to go fishing." Hearing it my mother got angry, but he came again next early morning and kidnapped me by a boat. He kept rowing the boat and left me away on a tiny beach surrounded by precipitous cliffs. I cried and cried and then fell in a sleep.

Then in my dream a god apeared and said,

"Don't cry, boy. I help you to go back to your mother. This cliffs are so steep that ordinary men can't climb up, but you can do it easily with my help. Your father was also killed here. That's why your mother was crying everyday. Now your mother is starving to die. Go back and help your mother!"

I woke up and climbed up the steep cliffs easily. Then I walked and walked for my home for many years. When I eventually came back and entered my house, I found my mother was reduced to a skelton. I shook her up and we were pleased at our reunion. She said,

"Your uncle came back and told a lie that you had been pulled by a big fish into the sea and died. Then he wanted me to his mistress. As I rejected it he got angry and stole all valuable things in my home. But I found a sword and a spear left under my bed. Go and revenge with them!"

Then I went to my uncle's house with the sword and spear. When I entered the house, my aunt saw me and cried out then my uncle cried out, too. I stabbed them with my spear and cut off their heads with my sword. I called my mother in and had her inspect which ones were our stolen things. After we brought them out I set fire to the house.

After that I took care of my mother and she recovered her health. Then a beautiful woman walked by my home and became my wife. She was very hard worker and also I caught good games in the mountains or fish in the rivers. My mother died young but we got many children and lived happily.